

連載 （供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十二回 狩猟採集社会と農耕社会の祭祀の連続性

南出喜久治（令和7年2月15日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

狩猟採集社会と農耕社会とが異質の社会であり、農耕社会によつて狩猟採集社会が駆逐されたとする見解がありますが、そのやうな事実はありません。いずれの社会の民も、すべて祭祀の民です。生活の糧を得る方法が異なつてゐるだけです。

イギリスの詩人トーマス・エリオットは、「ある共同体（リージョナルコミュニティ）に、ある他民族が、ある一定以上、ある一定速度以上で入つてきたら、その共同体は崩壊する」と言ました。これは歴史的事実であり、大量の移民が押し寄せたアメリカ大陸がその典型例です。急激な異民族の流入は社会を壊します。ましてや先住者を暴力的に排除する事態の場合は尚更のことです。社会防衛といふのは、祭祀防衛のことであり、國體護持とは祭祀護持のことです。

狩猟採集社会から段階的に農耕社会に移行しましたが、それは狩猟採集民の社会に農耕民に流入して祭祀社会を崩壊させたのではなく、祭祀社会をさらに強固なものになつたのです。決して、祭祀の民の社会に祭祀否定の民が急激に流入して「農業革命」なるものが起こつたわけではありません。ヘブライ大学教授のユヴァル・ノア・ハラリは、『サピエンス全史』の中で、狩猟採集社会が「農業革命」によつて農耕社会に変はつたと言ひますが、農業革命なるものは全く存在しません。単に祭祀の民の生活の糧を得る方法が環境の変化によつて新たな段階へと移行しただけなのです。

つまり、狩猟採集社会から農耕社会への変化は、突然に急激に変化したのではなく、狩猟採集民と農耕民とは共存協同しながら徐々に社会形態が変化して行つたのです。その変化は、社会を崩壊させない緩やかな速度でした。

狩猟採集社会を維持するためには採集した食糧の貯蔵と備蓄が必要となり、その貯蔵場

所を守るために定住化が進み、さらに、食糧の貯蔵・備蓄の変形として家畜、役畜（卵を生む鶏、乳牛）、主食としての栽培植物（小麦、稲、ジャガイモなど）が進みました。狩猟採集は得意とする者による分業を深化させ、狩猟採集、農業、酪農などが混在しながら連続的に漸進的に変化して行つたのです。貯蔵・備蓄は、狩猟採集と農業とに共通したもので、貯蔵・備蓄の態様と方法が多様化したといふことです。

それは、養蜂業を例に取り上げれば解ります。蜂蜜やロイヤルゼリーを採取するには、自生してゐるミツバチの巣を探して採集する方法から始まります。これは狩猟採集の営みです。しかし、それでは偶然性が高く常に手に入るものではありません。貯蔵・備蓄する量も僅かです。そこで、ミツバチの巣を管理しやすい場所に数を集めて移して養蜂場を作り、それを管理すれば貯蔵・備蓄の効率が高まります。これによつて採集すれば蜂蜜を貯蔵・備蓄することができます。これは農耕の営みと同じです。

このことは、栽培植物についても同様です。食料となる自生植物を採集するよりも、管理した場所で栽培して収穫することは、これまでの採集の方法と同じ意味となり、同時に貯蔵・備蓄ができます。狩猟についても、食料とする動物を飼育して家畜にすれば食料の貯蔵・備蓄が実現できます。

そして、これらの貯蔵物を備蓄して野生動物に食ひ荒らされないためにも常に監視する必要があるために定住がはじまります。狩猟採集民は非定住、農耕民は定住といふ二分法で捉へる考へは誤りです。

人類は、火を使ひ、動物から身を守り、生活に利用します。狩猟採取民も、生活に適した場所に定住しなければ、火を使ふ調理、そのための土器とその製造、捕獲した獲物を洗浄し、調理に使ふ水を確保することなどができません。生活の必要な物を生活の拠点を移動するごとに持ち運んで野宿を続けることは困難ですし、安全で安定した生活ができるために定住することは不可欠なのです。

また、定住する最大の理由は、祖先祭祀の斎場である祖先の「墓」がある地域から遠く離れることができないためです。つまり、定住は、祭祀の維持のためだつたのです。

狩猟採集社会と農業社会には連続として祭祀が営まれてをり、祭祀については脈々として受け継がれて来ました。むしろ、定住によつて祭祀を維持し守り続けることができました。狩猟採集社会と農耕社会とは分断社会ではなく共存共栄の連続した社会だつたのです。我が国でも、石器時代、縄文時代、弥生時代などと区別しますが、いづれも祭祀の連続性が認められてゐます。

それを示す遺跡が世界的にあります。農耕民の祭祀遺跡として、ストーンヘンジ（イギリス）が有名ですが、平成 7 年に、トルコ南東部ギョベクリ・テペで、石柱の記念碑的構

築物が発見されました。これは1億1500年前の狩猟採集民の祭祀遺跡です。また、マヤ文明のヒスイの緑は、生命再生を意味し、ピラミッドは、天上界、地上界、地下界を示しています。マヤ文明の最古にして最大の遺跡としてアグアダ・フェニックス遺跡（南北 1.4 km 東西 400m）が発見されましたが、これは、基壇（盛り土）によつて作られた共同の祭祀場です。それ以外にも、全世界で見られる、日常生活で実用性のないトーテムなどの構造物はすべて祭祀施設なのです。

土器、陶器、磁器などのうち、生活必需品ではない物以外はすべて祭祀用の祭具や供物です。絵画、彫刻などの芸術品、工芸品とされる物は祭祀のためのもので、歌舞音曲も同じです。今では娯楽として、祭祀とは無縁と思はれてゐるものは、すべて祭祀のための物でした。食べ物も、神人共食として祖霊にお供へした後の供物を頭上に戴いてお下がりを受け「戴きます」との礼言（ゐやこと）を述べて食するのです。

祭祀が続いてきたのは、歌舞音曲などの娯楽的要素があつたためで、神人共楽のハレ（晴）の営みであり、日常性のケ（穢）との区別がありました。ところが、祭祀を忘れた者たちによつて、今ではハレ（晴）とケ（穢）の区別がなくなり、祭祀抜きケ（穢）の絵画、彫刻などの芸術品、工芸品、そして歌舞音曲が独り歩きし、それが商品化してケ（穢）だけの世界になりました。